



アイヌ文化の振興、現在と未来  
第8回

# 次世代にアイヌ語を伝えるために



関根 健司 (せきね けんじ)

1971年生まれ、兵庫県出身。26歳の頃から平取町二風谷に移り住む。インタビュー時はアイヌ語教室講師だったが、現在は平取町立アイヌ文化博物館学芸員補。アイヌ語教室にはボランティアとして携わっている。

関根 真紀 (せきね まき)

1967年生まれ、北海道平取町二風谷出身。アイヌ工芸家。インタビュー時はアイヌ語教室にはボランティアとして関わっていたが、2015年度から再び講師を務めている。

札幌大学ウレシパクラブに学生として所属していた際、「開発こうほう」の「アイヌ文化の振興、現在と未来」に、アイヌ文化に携わっている人たちにインタビューをしてそれを記事にしたいという依頼がありました。とても興味をひかれたので、卒業制作の一部として引き受け、4組の方々にお話を伺いました。4回連載で紹介しますので、ぜひご覧ください。(竹内隼人)

関根健司さん・真紀さんご夫妻は、平取町二風谷アイヌ語教室子供の部で講師を務めています。お二人に、次世代にアイヌ語を伝えるための思いや最近の取り組みについてお話を伺いました。アイヌ語を教える際の苦労や楽しさなど、アイヌ語に関心を持つ方はもちろん、普段アイヌ文化に接する機会の少ない方にとっても興味深いお話がたくさんありました。

## — アイヌ語教室の講師になったきっかけを教えてください。

**真紀** 私は萱野茂<sup>※1</sup>さんに、アイヌ語教室の講義記録のテープ起こしをやらないかと言われたのがきっかけです。娘の摩耶が小さくて、ちゃんと仕事できなかったからテープ起こしを始めたんだけど、なんだか昔聞いたことあるようなアイヌ語があったり、すごく興味を持ったんだよね。それで、萱野志朗さんの助手として子供アイヌ語教室を手伝うことになったのね。子供が小さいからちょうどいいだろうと。それで2、3年やって、講師として任されたの。

**健司** そもそも子供の部の講師は、初めは本田優子さん(札幌大学副学長。2010年、学内に「ウレシパ・プロジェクト」を導入)がやってたんだよね。そのあとが志朗さんで。摩耶が生まれて小さい頃、志朗さんから嫁(真紀)に任せられた。その頃は土曜日の昼間にやっていたと思う。初めは俺、メインで関わっていなかったんだけどね、だんだん関わるようになった。実際、講師になったのは今年(2014年)なんだよね。講師は講師料発生するので、今年から講師料が届いている。アイヌ語教室は、平取では町の事業で、大人の部と子供の部があるの。

※1 1926生～2006没。1983年、二風谷アイヌ語教室の前身である二風谷アイヌ語塾を創設。二風谷アイヌ文化資料館館長(当時。二代目館長は、子息の志朗氏)。1994年、アイヌ民族初の参議院議員になる。

## 二人の指導方法の違い

### — 教える際に気をつけていたことはなんですか。

**真紀** 私はやっぱり耳で聞いていたことを大人になって思い出したの。「あ、聞いたことあるなあ」って。子供たちも勉強じゃなくて耳から入っていけば、大人になった時に「あ、あの時習ったなあ」って思い出したなら、それが起爆剤になるかもしれない。そこから、アイヌ語をもう一回やってみようという子供が出てきたらいいなあと思って、続けていたの。

私は子供たちに楽しんでやらせる努力をしていたつもりだけど、健司さんが手伝ってくれるようになったら、全然違った。健司さんは、いろんなやり方をもっと出してきたし、月に2回だったアイヌ語教室を「講師料がなくても習い事みたいに、毎週にしよう」と言って、平日の木曜日の18時～19時半にしたの。平取町からは、2回しか（お金）出ないのに4回やられても困ると。それで、1時間はボランティアみたいな感じで毎週やるようになったから、子供たちも本当に当たり前のように休みの日でも来るし、すごいと思う。私は、なめられた講師で、友達感覚でやっていたけど、健司さんは線引くところは線引いて、普段は遊び。だから、私より適任者。

### — 教えることの難しさはどういうところですか。

**真紀** 自分がわかってないくせに、ただやってるのが、“アイヌ語の先生”みたいになって、その重圧に耐えられない部分もある。子供に教えるのにまず自分がアイヌ語の数字の1から10まで覚えて、1から10まで教える。



真紀さんが指導するアイヌ語カルタ

挨拶文を覚えて、挨拶文を教える。天候の表現を覚えて、天候の表現を教える。だから、会話なんてやろうとも、できるとも思っていなかった。でも健司さんはやろうとしている。

難しいのは、アイヌとアイヌじゃない子が混ざっていること。どの子供も平等に教えるけれども、どこかでその、ちょっと崩れないかすごく不安。アイヌ語を習っていることで、誰かに何かを言われて来なくなる子供がいたら困るから。楽しいって感じで、どんどん教え込む。アイヌ語やってたら将来、いいことあるかもしれないよと。アイヌ語の利点を伝えたいと。私利私欲はないけれど、言語学者でもないから、生活していかなければならないでしょ？趣味でやるアイヌ語って結局どうなるのか。ばあちゃんが使っていた言葉でもあるから、大切に伝え残していきたい部分もある。でも、自分の頭がついていかないと。

前に面白いことをしたね。「あるところにおじいさんとおばあさんがいました」と言って、「はいっ！」と振ったら、子供が「ある日おじいさんは、アイヌランドに行こうと、飛行機に乗りました」。次の人「そしたらその飛行機が落ちてしまいました」。次の子供「おじいさんは死んでしまいました」。そして、「その頃のんきに昼寝をしていたおばあさんは」「それを見ていたフクロウの神様がおばあさんに知らせに手紙を持って行きました」「手紙をもらったおばあさんは、ヨモギの葉でフッサフッサ<sup>※2</sup>して、おじいさんは生き返りました」「おばあさんは泣いて喜びました」とつないでいって、それをみんな絵に描いて、そうやって遊んだり。想像力が豊かですごい。「あるところにおじいさんとおばあさん…」から、フクロウの神様が出てきたり、ヨモギでフッサフッサとか、最終的にちゃんとアイヌで落ち着いた（笑）。

### — 健司さん、指導方法も含めて、講師についてもう少し語ってください。

**健司** 俺は昔、子供って嫌いだなと思ってた。わがままだし。今でも、どうかわからない。理想的な先生だとも

※2 ヨモギの葉は魔払いの効果があるとされており、フッサフッサと言いながら行う。

思わない。真剣に怒ることもあるしね。子供が勝手に遊ぼうとしていたら、「もう来るな」ぐらい言うからね。挨拶もできないで、入ってきてすぐに遊ぶ。まず、イランカラフテ（こんにちは）は言わせるようにしているが、それができない。それが5人も6人もいたら腹が立つ。「帰れ！」ぐらい言うとシュンとしちゃう。「返事は！」と言ってハイッと言わせている。

### アイヌ語教育のこれから

でも、おこがましいけど使命だから。俺以外いないから。実際は、俺がいなかったら誰かやるのかもしれないけれど、俺のやり方で割に興味持ってもらえるかも知れない。ただ、俺はもっともっと長時間やりたい。できれば週2回にしたいし、放課後の子供教室、学童保育のように5時ぐらいまでアイヌ語だけでやるとかね。それなら、すごく効果がある。テレビのニュースで見たのでは、東京で、それを英語だけでやってる。月に7万円くらいで高級なんだ。先生はアメリカ人などで英語だけ。親が英語しゃべれなくても、子供はそこに行けば結構しゃべれるようになる。

ニュージーランドには、マオリ語だけでやってるところがある。効果てきめらしい。保育所で始めたら、子供たちがマオリ語で寝言を言い出すとか。北欧から来た人も、ニュージーランドの人たちもね。だから、忙しいけれど、今の週1回一時間半を例えば週2回にしたいと考えている。学校で出来ないなら放課後を全部アイヌ語



健司さんが指導するアイヌ語カルタ

でやるとか。

問題は、二風谷にいてもニーズはあるのかということ。二風谷でも「アイヌ語をやるなら英語をやってほしい」と言われる。俺みたいな人間が先走って、外国ではこうなんだ、やりたいやりたいと言っても、全体的なニーズがない。それはどこでも言えると思う。よその地域でもアイヌ語教室やりますと言ってもアイヌの人は来ない、シャモ（アイヌ語で和人のこと）の人は来たりする。それで結局続かない。だから、なんだろう、そこまで機が熟していないのかもしれない。ニーズがないところで押し売りもできない。アイヌ語ってあるんだ、話せたらカッコいいと思わせるように、努力していこうとは思っている。先祖から背負ってきたものがある人は責任感があるし、自分で、やっぱり楽しんでる。それに比べて俺はよそから来てやってるから、理由を説明できないよね。

英語は得意というか、まあ普通には話せる。この調子、この感じでアイヌ語も話せるはずだという俺の自信。英語に比べたら俺のアイヌ語はカタコトだけど、でもこの調子で勉強していけば、しゃべれるようになるのはわかる。例えばすごくアイヌ語ができる人たちはいっぱいいる。その人たちと俺が違うのは、俺はこの二風谷に住んでいること。二風谷はコミュニティなんだよね。二風谷にはメディアが来る。二風谷でアイヌ語教室やってると、アイヌ語に関する取材が来る。そうしたら、良きにしろ悪きにしろ、俺が最前線に立つ。俺自身がめっちゃくちゃ出来る人ではないことはわかっているが、マイナースポーツと同じ。選手が一番の宣伝マンにならなきゃと、頑張る。だから俺はとにかく頑張る。僕なんてできないですよという態度はとらないんだ。ちょっとでもメディアに出ることで宣伝になるなら出るべきだと思っている。目立ちたがりや出たがりとは思っていない。宣伝マンの気分だから。このバランス感覚が難しいよ。アイヌの人なら、すっきりする。アイヌ語をなんとか守りたい。そういうことを言えればカッコいいけれど、俺はここで活躍できる場を見出してるんだよね。自己申告だから、先生だと言えばその日から先生。先生だと言うから

には、自分に対してプレッシャーをかける。先生なら、もし質問されて、答えられなかったら恥ずかしい。それが自分へのプレッシャーであり、自分のモチベーションだね。

## お互いについて

### — 真紀さん、健司さんはどんな人ですか？

**真紀** 変人（笑）というのか、何か変えてくれるなっていう感じの人。ネガティブな部分をポジティブに持っていつてくれる。今は平取アイヌ協会青年部に、週1回勉強会をやろうと健司さんが呼びかけ、毎週月曜日に、青年部7人ぐらいで、テ・アタアランギ<sup>※3</sup>をやっている。「工芸館 オルン カラパ KOGEIKAN or un k=arpa（工芸館へ私は行く）」と、ちゃんと場所の表現も覚えて、変えていくのはすごい。この前は、ヘンパラhempara（いつ）と、ヘマンタhemanta（なに）を覚えて、「クネキクス 工芸館 オルン カラパ（私は働きに工芸館に行った）」と言えるの。すごいテ・アタアランギ効果。「何しにいくんだ？」「タバコを買いに松崎さん（二風谷にある商店）に行く」「ラーメンを食べにBEE（ランチハウスBEE）に行く」「民芸館に木彫りをしに行く」とか、普通にしゃべれるの。たった7時間ぐらいだよ。最初から、流暢な話者になったようにね。アイヌ語縛りで、青年部効果抜群だよ。

**健司** 真紀たちは、家族や兄弟も才能がある。才能があるが、努力しないみたいな人たちでね。どう思うも別に



テ・アタアランギ法を実践している

ないよ。すごいところも、だめなところもいっぱいあるからね。でも普通の女じゃないよ。俺は言いたいことガンガン言う。「おかしくないか！それは」と言えばわかるが、またやっちゃう。俺とは性格が違う。俺はちゃらんぼらんに見せてて努力家だからね。この人はどうなのか。努力家にも見せないし、普段の練習も何もしない。それでも、木彫りをさせたら、割とたいしたものをパッと作っちゃう。これで、努力家だったら大変だろうけどね。

— とても個性的なお二人という印象でした。これからも全力で次世代へアイヌ語を伝えていってください。どうもありがとうございました。

インタビュー日時2014年12月6日



インタビューー

**竹内 隼人**（たけうち はやと）

1992年生まれ、北海道札幌市出身。幼少の頃に家族の影響で札幌ウポポ保存会でアイヌの踊りに親しむようになる。札幌大学文学部文化学科歴史文化コース卒業。在学中はウレシバ奨学生として札幌大学ウレシバクラブに所属。現在は白老町にある、(一財)アイヌ民族博物館の伝承課に勤務している。

※3 テ・アタアランギ法。マオリの言語復興の一つの学習方法。言語を覚えるために、決められた時間は指導者も生徒もその言語しか使わないなどのルールがある。